の住民などが、凉しい木々に圍まれた中で、一つの焚火を打ち圍みながら、夜を徹して亂舞するのを、この上もない娯樂とするが如き、それが夜間を選ぶところに興味がある。この種のものとして、古代希臘に行はれた夜の祭で、酒神なるディオニソスの祭の如き、其の最も面白いものである。即ちテーベスの女はキテーロン山へ、アッチカやデルフォの女はパルナッス山へ、何れも夜の暮るるを待つて山に登り、髪を亂し、手や首には蛇を卷きつけ、長春籐や葡萄の蔓の捲きつけられた棒や炬火を振り立て、笛や太鼓を打ち鳴しながら、茂みの中や丘の上や谷の底を、歡喜に滿ちた狂亂の有樣で、踏(ふと)り歩いたものである。

これ等は僅の例に過ぎないけれども、晝から夜へかけての祭や夜のみに行はれる夜祭の多くが、如何にそれ等の祭を樂しむ人々には、夜であることが外行(よそゆ)きの外皮を剝き出しての氣樂さで行はれることであらう。

七、享樂に薄暗

樂隊が演奏して居るのを聽きながら、人込みを前へ前へと押して行つて、樂隊が見えないと不平をいふやうなことは、必ずしも珍しいことではない。聽くべき音樂が、見えないとて不平をいふ人々に、眞の音樂の享樂がなされ得るのかどうかは、遽に判定は出來ない。けれども普通に吾々が、特殊な對象によつて或享樂を味つて居る場合には、他の不必要な刺激をなるべく受け入れないやうに努めるものである。話に夢中になつて知らない間にお腹が膨れたといふやうな場合に、食物に對する深い享樂が、充分得られぬことはいふまでもない。騷々しい雜閙の中に、押し合ひへし合ひ汗みどろになつて、展覽會の藝術品が滿足に味へないのは、寧ろ當然なことである。

若し着衣や飾身品に愛好の念の強い婦人が、明るい觀覽席に坐を占めて、美

々しく着飾られた絢爛なあたりの光景に注意が支配されるならば、其の婦人の演劇に對する享樂は、頗る乏しいものといはねばならない。尤も劇場内の享樂の中心を、自己の着衣や飾身品や容貌に對する誇示に求めて居る一部の人々はそこに自己の享樂を見出して居るのであらうが、それは私のここでいはうとする意味の享樂ではない。一生一代の晴れ着が出來たからとて、遂ぞ出掛けたことのない音樂會にも行かうといふ心持ちも、亦私のいふ意味からは遠いものである。けれどもかかる誇示や晴れ着のお出掛けも、觀覽席や傍聽席の薄暗いといふことで、其の感興を大に殺がれることになる。從つて觀覽席や傍聽席の薄暗いことは、單に舞臺や演奏者に注意せしめる上に好都合なばかりではないのである。但し上のやうな特殊な欲望の所持者は、機會を作つては明るい廊下や控室をあちらこちらと歩き回りたがるものである。それは兎に角、氣兼ねのない自由な寛ろいだ自己を以て、或享樂を得んとする場合に、殊にそれが目や耳

で以てされるものである時には、自己の周圍の薄暗が、大に享樂への力を添えるのである。即ち眼の覺めたやうだといはれる明るさより、陶醉的氣分を豊ならしめ易い薄暗の方が、好都合な場合が少くないのである。民衆的娯樂物となつて居る活動寫眞館への入り易いには、觀覽料の廉なことも勿論關係して居るが、觀客席の薄暗いことも大に關係して居る。尚又、自己を暗さに置いて、明るさに享樂の對象を求めること自らにも、少からず適切なものがあるのである。

のみならず吾々の享樂には、餘りに形式に捉はれないことと、細かな理知の加はらないことが肝要である。而してかかる形式を不明瞭にし細かな理知を漠然たる中に封じ去る上には、薄暗が頗る適當である。薄暮に婦人の多くが美しく見えたり、ヴールを隔てての顔が艶に見えたりするのはそれであつて、何れも不調和や缺點や醜が薄暗で覆はれてしまうのである。白晝には何の奇も認められない汚い街路の光景が、夜景としては捨て難いものとなるが如き又それで

ある。

瞑想に耽り思索に耽つて居る人々の中には、薄暗を故らに選ぶ人が少くない。即ち思索に際して、瞑目するのもそれであるが、光力強き皎々たる燈下にあるよりも、薄暗い光力の燈下を好むが如きも亦それであつて、電燈や瓦斯燈の普及して居る大都市の中央にあつても、特に石油燈を用ひ、そこに却つて落付きある心持ちを得て居る如きそれである。或は暗黒な岩窟内に閉ぢ籠つて修道する行者の如き、又薄暗の力を借りて居るものといふことが出來る。

八、宗教的氣分

闇黒は、前に述べたやうに不安や羞恥や躊躇を去らしめて、普通ではなし得なかつたことをも敢てする勇氣を與へるものであるが、又反面に於ては特殊な恐怖を得せしめることがある。殊に闇黒に靜寂の氣の加はつたやうな場合に於

て、それが顯著に經驗されると共に、神秘の感や孤獨の淋しさ恐ろしさが經驗される。幽邃な森林や高峻な山嶽に、日の傾くのも氣づかないで自然の大觀に醉つて居た旅人が、刻一刻と夕靄に包まれ闇黒の幕に閉されて、大自然の中に自己をのみ明かに見出した時、白晝の詠嘆は去つて孤獨の淋しさ恐ろしさが迫まり來たり、そこに言ひ難き或神秘の感に襲はれることであらう。同じく闇黒からの經驗ではあるが、雜鬧の巷に起つた闇黒からの經驗とは、全然其の趣を異にしたものであり、これが卑俗的氣分を逞しうせしめるものなれば、それは宗教的氣分を漲らしめるものである。即ち吾々は對他人的な又對世俗的な境地から遮斷されて、靜寂や孤獨な中に自己を投ずる時、宗教的氣分に至り易い。宗教に入らんと努力する人々が、人界を去つて山間に潜むが如き、皆この氣分を容易に得んが爲めである。而してかかる對他人的な又對世俗的な境地から自己を遠ざけることの一つは闇黒である、何となれば闇黒は總ゆる物象を吾々の

眼から奪ふものであるからである。

戒壇廻りといふものがある。これは寺の本堂の下や山の横腹などへ、闇黒な隧道を造つて、特殊な宗教的氣分を味はしめるものである。稱名の聲幽に、危げな足を一歩一歩闇黒裡に導く、そこに假令一時的であるにせよ、靜寂孤獨の中に讃仰的對象を心から念じ得られるであらう。但し今日見られる繁昌せる寺の戒壇廻りの如き、面白半分に多人數がわつしよわつしよと押し合ひながら、笑ひ興じ戯れながら這入る場合には、多くは單なる好奇心に滿足を與へるに過ぎない。けれどもかかるものを造つた古人の動機は、少くも一寸先きも見えない中へ人を導いて、そこに其の人の宗教的氣分を喚起しやうと試みたものに相違ない。事實上、素樸な順禮者は、これを信仰心の薄い厚いの試練場となし、又貴い宗教的經驗と心得て居るのである。

このやうに闇黒と宗教的氣分とは、密接な關係を持つて居るが、其の最もよ

い例として、私は宗教建築の場合を擧げて見たい。かの古代埃及に建立された大伽藍は林のやうに立ち列んだ太い柱を持つた暗い殿堂であつた。赤道近い强い太陽の光を捨てて、靜々と階段を踏み、一歩一歩暗い殿堂の内へ入つたものは、其の薄暗い氣に迫まられ、祭壇に搖らぐ燈火を見て、如何に人界を離れた神聖な神秘な又崇嚴な心持を味つたことであらう。そこに彼等は其の信仰であつた精靈の漂泊するのを見るの心地がしたことであらう。又印度や支那の處々に見られる岩窟寺の如き、殊に山腹の岩壁を鑿ち柱を刳り拔き佛像を彫り、壁に畫き天井を飾つたアヂャンタの岩窟寺のそれの如き、佛像や佛塔の安置された内部は薄暗く、朝に夕に佛に對する隨喜讃仰の徒が禮拜には、又とない境地であつたであらう。

明白は吾々を究理に導き易いが、闇黒や薄暗は吾々を混迷に陷れ易い。それと共に闇黒や薄暗は、特殊な對象と吾々との間に神秘や不明や迷妄の幕を垂て

るものである。この神秘や不明や迷妄の幕は、人間自らの制作した信仰の具體的の對象たる偶像に、宗教的氣分を漂はせ神靈化する上に助となるものである。この點が、偶像崇拜を主とした種々の民族の宗教建築に、故らに薄暗い殿堂や神壇を設けしめたことにもなつたのであらう。そこへ殆んど總べての場合に見られる佛前神前に奉られた燈火が、ほの暗い内に輝いて、一層信仰の對象への誘ひと光明と凝念とを完ふせしめたのである。

九、幽靈の出現

白晝出現する幽靈もないことはなからうが、幽靈を見たといはれる場合は、殆んど常に夕方か夜間である。外からの光のよく射し込む明るい家よりも、何となく陰氣な家から、廣々とした蔭のないところよりも、欝々と茂つた森から、幽靈は多く出現することになつて居る。かくて幽靈に關する戯作者なども、日

がとつぷりと暮れて雨さへ催しげな闇夜に、幽靈どもがそろりそろりと現はれて、彼等の世界となるやうに述べて居る、それが幽靈の思想に對して適したことになるのである。芝居で幽靈の出るやうな時には、急に舞臺が暗くされる、これも闇黒と幽靈とが聯想上好都合な爲めに外ならない。

元來闇黒や薄暗は、吾々を混惑迷妄に陷れ易い、從つて外界事物に對する認識を極めて不正確ならしめる。そこで吾々が先づ眼に映ずる上の錯覺幻覺を經驗する上に好都合である。白晝ならば注意もされないやうな物干の浴衣や神社の森の鳥居に下がつた注連縄の白紙や野道を通る提灯の火などが、夜に入つては幽靈とか怪物とかに、美事に變化し得るのである。殊に性質の臆病である人は、自ら樣々な幽靈を心裡に畫きながら、恐る恐る而も恐ろしい物見たさの好奇心から、充分に見極めもしないで、幽靈らしいもの又は幽靈と見立ててよいものを求めて居る有樣である。而してかかる幽靈らしいものや幽靈と見立てて

よいものは、闇黒や薄暗によつて極めて得られ易い。如何に臆病なものであつても、白晝に幽靈を見ることは極めて稀であつて、矢張りそれの代用的對象の得られ易い夕方や夜間が殆んど常である。

のみならず闇黒や薄暗の中で混惑迷妄に陷つて居るものは、其の耳に聽くるところの事物に對しても、幽靈を見出し易いのである。即ち何等眼に見える幽靈らしいものはなくても、四圍から響いて來る音に、それらしいものを捕へ易いのである。松籟の音や蘆荻の葉の戰ぐ音や夜鳥の羽音などが、臆病な氣に襲はれ又は幽靈の出現を期待しつつある人々に、如何に屢々幽靈や怪物とされたことであらう。晝間氣にも留めない自分の足音が、暗い夜道の一人歩きの時には、特別に臆病な人でなくても、誰か來る足音ではないかと、振り返へらしめるものである。

要するに闇黒や薄暗といふことで、人の制作した而も人神の技にもよらない

平凡なものが、又は極めて卑俗なものまでが、よく神秘化されて、信仰の對象となるやうに、何等幽靈に關係のない又愚にもつかないやうなものまでが、よく幽靈化され怪物化されるのである。それが私のいふ闇黒の力である。吾々の生活に、夜間といふ暗い時があつて、又吾々自らが見慣れぬ聞き慣れぬ未知な或は不解なものに出逢ふ機會のある以上、假令幽靈といふ思想はなくなるにしても、闇黒を介しての怪物の出現は、何時までも續くことであらう。

物凄い藝術的創作に努力して居る人々の中には、故らに其の制作に適したやうな境地に自己を導き入れて、特殊な興奮と感興とを味はうとして居る人がある。例へば人の寢靜まつた深更に、廣い室で故らに燈火の薄暗いのを選んで、制作に着手するが如きそれである。かかる場合には、固より靜寂といふことが大に關係しては居るけれども、薄暗い一室に自己を置いて居ることが少からぬ力となつて、恐ろしげな凄愴な氣分を與へ、そこで白晝又は皎々たる燈火の下

では、思ひもつかないやうな作物を、創作し得るのである。

一〇、白晝の畏怖

以上述べたところのものは、何れも闇黒とか薄暗とかによつて經驗される特殊な事實であつて、暗い力の積極的に働いた場合であるが、次に私は、明るい力を畏怖しそれを避けて、暗い力に隱れる消極的な場合を述べやう。但し犯罪などした人が、白晝を恐れて薄暮に出歩くのは、固より一種の白晝の畏怖には相違ないけれども、それは白晝そのものを畏怖するのではない。卽ち彼等は白晝であると對他的の警戒や不安や羞恥を感じなければならないので、それ等を感じなくてすむ暗い時を選んで身を隱すのである。然し私がここでいふ白晝の畏怖といふのは、白晝によつて得られる特殊な經驗を畏怖するのではなくて、單に白晝其のものを畏怖する場合をいふのである。換言すれば白晝の刺激に堪

えられなくて、故らに暗い時を選ぶものをいふのである。

近代の生活は、吾々をして樣々な偏した方面に向はしめた。殊に近代的生活の特徴を、最も濃厚に發揮して居る大都市の生活は、其の煩瑣な生活狀態から、其の複雜な社會的施設から、又其の近代文明に伴つて現はれた種々な事物から、大多數の民衆をして頗る變態的に傾かしめて居る。固よりかかる變態的傾向には、生活難や激甚な生存競爭といふことも大に關係して居やうが、兎に角、精神的に又身體的に過勞せしめて居るところに、注意すべきものがある。かくて大都市生活者の少からぬ部分は、神經衰弱的な神經質的な狀態となつて居る。その神經衰弱的な神經質的な狀態は、自ら人をして過敏ならしめ、一方に於ては、强い刺激に對して不安や不快に堪えざるの感を得せしめ、他方に於ては何等か變つた好奇的な刺激を追求せしめるやうになるものである。

靜な自然的な悠暢たる氣分に育つて居る村落の人々が、大都市の繁華な雜閙

の巷に立つて、茫然口を開いたままの驚愕狀態に陷るのは何を示すか。その巷に知らず識らず慣らされて居る大都市の人々は、假令それから特殊な感を經驗しないやうであつても、村落の人々が驚愕自失する丈けの刺激は受けつつあるのである。よしそれを村落の人々と同じ程度な刺激として受け取らないにしても、少くも大都市の人々の官能を過勞せしめ過敏ならしめて居ることはいふまでもないことである。かかる過勞な過敏な官能の所有者は、白晝のぎらぎらした目眩しいやうな强い日の光に、眼を細めながら歩かなければならないのである。尤も大都市の人々の多くは、其の日常生活の大部分を陰欝な屋内生活で過して居る、從つてそこにも亦日の光に目を細める傾向を生じ易いのである。

それと共に、文化の進歩につれた燈火の發達が著しく、その爲めに文化の最も多く取り入れられて居る大都市の人々は、最も多く燈火の恩惠を受けて居る。かくて燈火の發達は、都會人をして益々其の日常生活を夜の方へ繰り延べしめ

ることになつた。軟かな靜かな細やかなさうして美しい燈火の輝き、それは如何に現代の都會人の誇りであり、又喜びであらう。ぎらぎらした日の光に眼を細めたものは、暗い大空を戴いてこの華やかな燈の下に、如何に文明の享樂を味ふことであらう。過勞な過敏な官能の所有者は、蒼穹から照り輝く太陽の光に對して、其の强きに失した刺激を避け、或はそれを畏怖するまでに進み、果ては纖細な刺激としての軟かな光や、小さくて强い光や、靜かな搖ぎの光や、どんよりと潤んだ光や、淡い高雅な色の光などを迎へるやうになる。繁雜と醜穢と砂塵と煤煙とを、まざまざ照りつけて居る白晝の街頭は、夕暮れの薄暗に包み隱されて、美はしい燈火の燦然たる中に美化されてしまふ。そこに都會人の歡樂と憧憬とが出現する。これも白晝を厭ふて夜を愛好する一つの要素には相違ない。

けれども吾々は、薄暗にならなければ街頭へ出られないといふ日光の畏怖者

や、白晝の目眩しいやうなぎらぎらした光景に堪えられなくて、故らに薄暗い室に籠り、又は戸を閉ぢて頭から毛布を覆ひ光の弱い洋燈の下でなければ、落ちついて書見も出來ないといふ偏異者などを見る時、假令かかる人々が其の數に於て少いにせよ、過勞な過敏な官能の所有者に富む現代生活の一面を、窺ひ得たやうに思はれるのである。

元來、吾々はその生活に晝と夜を持つて居る。そこで夜の主要素である暗いことに支配されて居ることの顯著であるのは、猶晝の主要素である明いことに於けるやうである。この意味で吾々の生活上に、闇黑其のものから特殊な影響を受けて居ることの多いのも、敢て怪しむるに足らぬことである。

懺悔と其の狂ひ

一、懺悔の安易

如何なる事實でも、それを內心に秘めて抑えて置くことは極めて苦しいことであり又極めて出來難いことである。秘密にして居る善くないことや、自分の惡かつたと氣のついたことを持つて居て、それを心の奥底に疊み込んで置くものが、人知れぬ不安と苦悶とを經驗するのは、其の通例である。かの犯罪をしたものが、自分の犯罪事實を訴へ出た後には、それまでに滿足な睡眠も得られなかつたものが、安々と前後不覺に床に就かれるやうになる如き、假令一面の發覺や捕縛に對する心勞の除かれたことがあるにしても、內心に隱されて居た

秘密暴露に因る精神の安易のあることはいふまでもないことである。

或作用が加へられた場合に、それに對する反動の起ることは、必ずしも物理上の現象のみではない、吾々の精神上にも常に見られることである。「誰さんに宜しくいつて下さい」といふやうな開放的な事實は、假令其の人に日常出會ふ機會を持つて居る人であつても、傳へられずに終り勝ちなものである。然るに、「これは何人にも漏したくない、君と僕との間のことであるが」と、抑壓を加へて告げられた事實は、假令それが左程に注意すべき内容でもなく、又何等感興を惹き起すべきものでなくても、とかくに「君丈けには特に漏すが」といふ條件つきの下に、次から次へと傳へられ勝ちなものである。これは前者が自由に語られて居るのに、後者が抑壓の力を加へて語られて居る相違に、一つの主な原因を有して居るのである。これは、上述の吾々が自分の内心に蟠つて居る抑へつけた事實を持つて居る時に、それが現はれ出でよう現はれ出でようと自ら不知

不識の間に働いて居て、遂に懺悔の形式を取る事實をも說明するものである。

但し惡かつたと思つて居り又それに氣づいたことを、外部に開放して安易を得るには、單純に自分の心の裡で惡かつたと思つて居る丈けでは、充分に滿足されないのが普通である。即ち殆んど常に自分の惡に對する承認や同情や寬容や反對等を與へて呉れるやうな或聽き手を索めて、それに訴へやうとするものである。換言すれば、懺悔は自己一個の精神的出來事としてのみ限ることは、懺悔者に滿足を與へ難いもので、懺悔に對する他の人からの何等かの反應を要求することが多いのである。固より時には、懺悔を訴へる對象が人でなくて、擬人化された或ものに歸せられて居ることも少くない。其最も一般的な場合は、人に對して同情や愛憐を有して居ると思惟される神や佛であるが、時には特殊な形式をとつて、自分の懺悔を聽いて居る人のあるかのやうに空想裡に畫いて、それで以て滿足されて居ることもある。

かやうに懺悔は、個人の精神的出來事ではあるけれども、聽くべき對手を要する場合の多い爲めに、懺悔する者の特殊な變態狀態に興味ある場合の少くないと共に、其の對手の性質に因つても、樣々な興味ある事實を發生せしめて居るのである。卽ち懺悔自らは、其性質として精神上の苦悶を去らしめて、少からぬ安易を與へるものであるが、場合によつては必ずしも單純な安易の得られないやうな場合も少くはない、或は又必ずしも精神的の苦悶の爲めに、抑へ難き力の發現として懺悔が現はれる場合のみともいはれないのである。私は、これ等の意味から、以下に懺悔やそれに對する狂ひを述べて、吾々の精神の不可思議な又興味ある一方面に觸れて見たいのである。

二、懺悔の弄び

懺悔は、いふまでもなく秘めに秘め抑へに抑へた事實が、開放されて現はれ

出るのであるから、極めて眞劍な熱烈な激越な態度や感情を伴ふのが普通である。從つて懺悔は、易々と幾度も反復してなされるものではない。もし易々と幾度も反復してなされるやうな懺悔であつたならば、それは秘められた程度も、又抑へつけられて居た程度も、頗る輕かつた者である、のみならず其の人の精神生活に於て、さして有意義なものではない。かかる懺悔は、一般の有意義な懺悔に見られるやうに、懺悔者の內的生活や外的生活に對して、一新生面を開くやうな性質は期待されない。或は又かかる懺悔に於て、一般の懺悔に依つて得られるやうな精神上の著しい安易は、これを望むことが出來ない。

けれども懺悔が往々かかる輕い程度を以て、易々と反覆して行はれることがある、これを私は假りに懺悔の弄びと叫ぶのである。固よりこの種の懺悔に於ても、相當な眞劍さ熱烈さ激越さを見ることはある、宗敎上の集りに於て見られ易い懺悔に、この種のものが稀有でない。卽ちかかる懺悔は信者に感動を與

へ又は不信者を信者に導き入れんとする場合に、或一人の懺悔が同じ内容で幾度も繰返して行はれる時に於て見られる。この種のものは、懺悔そのものの性質を脱して、懺悔の利用といふことが主な役目を持つて居る爲めに、少からぬ誇張と故意らしい熱烈と、人の感動を喚起せんと努めるやうな態度とを伴ふもので、少しく冷静な態度で、それに接するものは、甚だしい不快と厭惡とを感ずるものである。如何に自己を信仰に沒入したものであつても、故らに自己の舊惡や不德や失敗を材料に取りたてて、眞劍に幾度も幾度も、見も知らぬ多數の人々の前で述べられるものではない。若し出來ればそれは既に懺悔でなくて懷舊談とか失敗談とかいふべき程度のものである。自己の秘事や惡事を或手段に利用せん爲めに、臆面もなく語つて、それを聽かされる人々こそ、迷惑でもあれば、又堪えられないことである。かかる場合には、宗教的の惑溺や殘忍の見られるか、後に述べるやうな同情强要を主とする虛僞が伴つて居るのが普通

である。「只今から誰さんの懺悔があります」と呼び出されて、幾度も幾度も懺悔する人自らは、特殊な精神狀態から眞面目で語られて居るにしても、又往々見られる例のやうに自ら好んで行つて居るにしても、その慘めさは爭はれない、のみならず俗人の眼からは、懺悔を弄んで居るものとしか解されぬのである。

これと稍相類したものは、酩酊者に見られ易い懺悔である。酩酊時は、何人も多少の異常が見られる、それが時には、好訴狂が或事實を動機にそれからそれへと限りもなく訴をするやうに、自分の過去に行つたことや考へたことを、特別に深い思慮もなくて、懺悔するやうな傾向に進むことがある。而してかかる場合に語られる事實の多くは、日常自分で秘めて置いたことで、惡るかつたとか公にするのは恥しいとかいふので、抑へつけられて居たものである。それが酩酊の爲めに、抑へて居る力が一時的に弛緩して、開放されるのである。尙この種の傾向は、酩酊に伴つた癖として現はれ、而も常に聽き手を捕へて行は

れる。從つて聽き手こそ頗る煩はしいことで厄介なことであるが、懺悔して居るもの自らは、それに依つて少からぬ安易と滿足とを得て居るのである。且かかる懺悔の常として、懺悔者は其の醒めた後には、殆んど何等關知しないやうな狀態で濟まして居るものである。私が懺悔の弄びの中に入れるのはその爲めである。のみならずこの種の一時的の懺悔狂は、聽かされ手が眞劍に應對して居ることを望むので、若し不眞面目な態度を以て接するやうなことがあると、不快や憤怒の情を起し易いものである。

三、懺悔の虛僞

懺悔の中には、それが假令極めて眞劍に又極めて熱烈に行はれて居つても、而も其の懺悔される內容は、無實な場合が往々ある。私はこの種のものをも、懺悔の狂ひの一つとして加へたいのである。

このやうに無實な內容を持つた懺悔は、樣々なことから起つて來るものであるが、それが眞劍であり又熱烈であればある程、懺悔して居るもの自らは、無實なこととは思はないで、眞實として取扱つて居ることが多い。かかる場合はいふまでもなく病的な場合である。かのヒステリー性の婦人などに見られ易い妄想に基づいた懺悔の如きは、其の著しいものである。卽ちこの種の人は、自ら不道德なこと罪なことと信じて居ることを、妄想裡で如何にも現實に犯したやうに思ひ、それが爲めに內的に苦悶を重ねた結果、遂に自分の最も信賴して居る人や親しい人に向つて、妄想に畫いたままを懺悔するのである。例へば妄想的に畫かれた私通や姦通などが其の主なものであつて、精神に異常を有する結果、何等特殊な原因もないのに、「自分を愛して吳れて居る人に背いて誠に申譯がない」とか、「自分の夫の友達が自分に馴れ馴れしく親切な態度に出て來るのは、自分が夫に對するよりも强く心を許したからだ」とか、樣々な性的關係

の事實を、有りもしないのに如何にも明瞭にありありと心に浮べて、それに悶えるのである。かかる狀態であると、種々な性的關係の錯覺や幻覺を伴ふことが多いから、一層懺悔しやうとするものには、如實の自己の經驗なり行爲なりとして、現はれて來るのである。從つてこの種の懺悔は、極めて眞面目に訴へられるものであるから、それが爲めに種々な方面に思はぬ迷惑や嫌疑を與へることがある。のみならずかかる懺悔には、間々懺悔者が妄想を逞しうして居つた場合に、殆んど恍惚裡に作成された艶書などを材料として、懺悔の內容の眞實を訴へやうとすることすらあるのである。尤もこの種の懺悔の虛僞は、懺悔者が餘りにくどくどしく訴へたり、餘りに多くの人々に訴へたりすることがあるので、其の妄想に基づいたものであることが、極めて容易に暴露される場合も多いのである。

矢張りヒステリー性の婦人などに見られ易いことで、同情の强要の爲めに、

懺悔の虛僞の行はれることがある。これは同情を得たいといふのが目的であるから、同情を得んが爲めに如何にも自分の內心の全部を示したやうに、有つたことと無いことを取り混ぜて訴へるのである。固よりこの種の懺悔の虛僞は、必ずしもかかる病的の人にのみ見られるのでなくて、普通の人であつても稍感情性で、暗示感性の强いやうな人であると、見られることがある。而してこの場合に興味のあることは、初めには同情强要の爲めに、故意に虛僞な事實を訴へて居つたのであるが、聽き手が餘りに冷靜な態度で居られたり、又餘りに同感的態度に出でられたりする時には、次第に知らず識らずの間に、深い空想裡に自分を導いて、さも眞實らしく又頗る熱烈に訴へるやうになり、それが尙昂ずる時には、初めに故意に虛僞を訴へて居つたのが、漸次に虛僞を虛僞と認めないやうな錯誤に自分を陷れることがある。殊にかかる傾向は、婦人が感情性であり又暗示感性の强い爲めに、婦人に於て特に見られ易いことである。卽ち初

めは懺悔を裝はれた虚僞であつたのが、遂に眞の懺悔の場合と同じやうな態度と精神狀態とに進んで行くのである。この意味で、私はこれをも懺悔の虚僞の一つとして述べたいのである。

四、懺悔の强迫

妄想の一種に、責罪妄想といふのがある。これは普通の場合であるならば、何等惡いことと思はれないやうな些細なことが、極めて惡いことであるやうに思はれて、苦しむのである。而もその惡いと思はれるやうなことは、常に屢々起つて來て自ら苦悶に苦悶を重ねて居るのである。從つて若しそれが開放されないで何時までも内心に秘められて居るやうであると、苦悶は次第に其の程度を昂進して來て、遂にそれを脱せんが爲めに、前後を顧慮する餘裕もなくて、自殺に導かれ易いのである。けれども若しそれが開放されて、自ら惡とか罪と

か思つて居ることを他の人に訴へて、其の場の苦悶を脱しやうとする場合には懺悔となるのである。而してかかる傾向の人は、何等か精神や身體に異常のある人であつて、精神衰弱の場合などにも見られるのである。

このやうに責罪妄想から起る懺悔は、常に責罪觀念が强迫的に生じて來て苦しむ結果起るのであるから、懺悔者自らも訴へずに居れないやうに、而も屢々强迫的に起つて來るのである。例へば私の或知人は、或偶然な事情から、自分の祖母に對する從來の不親切と思はれる態度が、極めて大なる罪惡であつて許し難いもののやうに感ぜられ、その爲めに苦悶に苦悶を重ねて、初めの中こそ自分の内心で「惡るかつた惡るかつた」と懺悔して居たのであるが、遂には自分の心の中の懺悔のみでは收まらないで、自分の信頼して居る人に訴へるやうになつた。但し其の不親切であつたといふ其の人の祖母に對する態度といふのは、決して取り立てていふやうな不親切ではなくて、祖母に對する一般の孫の

態度と何等選ぶところのないものであつた。而して其の人は教養のある人であつたから、妄想の何たるやを解し、又自分の經驗して居る特殊な苦悶が異常なものであることにも心づいて居た、けれどもそれを人に訴へることに因つて、少からぬ一時的の安易が得られたのである。かくて其の人は懺悔に因つて一時的の安易は得られたけれども、稍々病的な妄想が原因をなして居るのであるから、次ぎから次ぎへと强迫的に責罪觀念に苦しめられ、その都度人に懺悔したのである。

ここに興味のあることは、一時的にせよ上述のやうな病的の妄想を持つて居る場合には、何等か特殊な手段や事情の下に、今迄苦しめられて居つた或特殊な責罪觀念を壓し去り又除き去ることが出來ても、其の根本の病的の狀態が癒えない間は、又其の形式や內容を變じて現はれて來るのである。卽ち上に擧げた私の友人は、祖母に對しての懺悔の强迫は、種々な方面からの說得や例證な

どから、決して問題とする程の罪惡ではなくて、一般的のことであるやうに納得し得るに至つて、初めて其の影を潛めた。けれども今度はそれに代つて、特殊な責罪觀念が現はれて來て、又懺悔の强迫を經驗するに至つた。卽ち今度は一般の人々が普通に行つて居るやうなことに、責罪觀念が附加するやうになつた。例へば、卷煙草の吸殼を道路へ捨てた場合に、足で踏みにじつて置いた時は格別、それを不圖しなかつたことに心づくと、「あの吸殼に火がついて居たがああ惡いことをした、若し裸足の子供が踏んで火傷でもしたらばどうしやう、若し又風に吹き飛ばされて人の家を燒くやうになつたらばどうしやう、ああ惡いことをした」といふやうに、何時までもそれに苦しめられるのである。假令、それを人に訴へて、其の杞憂なることを話されても、又直ぐに「惡るかつた惡るかつた」と、自分の內心で、又他の人に向つて、懺悔しなければ落ち付けなかつたのである。

私は、自分の友人の中に見出した一つの例で、懺悔の強迫といふことを述べたに過ぎないが、かかるものは特に精神病といふまでもなくとも、幾分か其の時の精神や身體に異常ある場合に於て、見られることが珍しくないのである。從つてその異常のある間は、何等かの形式で、假令一時は抑へることが出來ても、又程なく他の形式で現はれて來るものである。

五、懺悔の強要

以上述べたところは、何れも懺悔が自己の内心に於て又は他の人に向つて行はれるもので、而も多少常態を逸した場合のものであるが、次に懺悔を訴へる人に對して、其の訴を聽いて居る人が、或特殊な事情の下に、時には幾分か自ら心づいて、時には何等氣づくことなく、懺悔を強いて要求する場合がある。この懺悔の強要をも、私は懺悔の狂ひとして擧げたいのである。

懺悔の強要される場合は、固より色々ある、以下其の主なるものに就いて述べやう。先づ一つは、復讐心の加味されたものである。例へば、自己の愛情や親切に背いたものを見出した時に、其の者から懺悔を強制的に要求して、懺悔者の苦惱に復讐の滿足を有するが如きそれである。殊にそれが嫉妬に對する復讐であるやうな場合には、一層それが顯著に現はれ、愛の反逆者に對する冷酷さと殘忍さとから、事實に基く單純な形式的な懺悔のみでは滿足しないで、懺悔其の者の性質としては不必要な程度にまで、些細な機微な點にまで渉つて、それが述べられるでないと、滿足しないやうなことが少くない。かかる場合の聽聞者の精神狀態は、昂進した空想から、懺悔される事實の内容の一つ一つを追つて、益嫉妬の念を強め、愈冷酷と殘忍との程度を高めながら、一方には極端な不快と聽きともなさとを持ちながら、他方には極端な好奇と聽きたさとを持つて、懺悔を強要するものである。

次には宗教的なもので、特殊な宗教的生活やそれに基つく禁慾生活をして居るものに於て、往々見られる懺悔の强要がある。これには懺悔者自らの舊惡や秘密の解放に因る安易又は舊惡や秘密に對する苦悶からの入信等に、聽聞者が特殊な感興と滿足と同情と同感とを經驗する爲めに、故らに同一人に幾度も幾度も繰返して懺悔の强要されることがある。かかる場合の懺悔者は、或宗教團體に新に加はつた新しき入信者であることもあれば、又或宗教團體の集りへ偶然に接觸して來た宗教的の迷ひの人であることもある。

特殊な宗教的生活に毒せられた者の間には、殘忍性を中心として又はそれを主たる動機として、懺悔の强要される場合がある。基督教の或一派に於て見られる懺悔聽聞僧の如きは固より一方に上に述べるやうな、比較的に單純な感興や滿足や同情や同感を經驗して居るのは、爭はれないことであるが、他方に其の特殊な宗教生活から得られた普通離れのした又異常な昂進をした殘忍性から

苦悶に苦悶を重ね、秘密に秘密を重ねた人の內的生活を强要して發くことに、變態な興奮と滿足とを經驗して居るのである。殊に、かかる場合には、容易に懺悔しなければしない丈け、一層それを懺悔せしめる上に、好奇心と熱心とを加へるもので、假令懺悔聽聞僧自らは、表面上宗教的要求から行つて居ると思つて居ても、彼等の有して居る殘忍性と、容易に懺悔しないものを懺悔せしめやうとする努力に因る勝利の感とが、懺悔の强要に對する執拗性を得せしめる上に、頗る多く關係して居るのである。

かくて懺悔の强要は、他人が秘密にして居ることを、懺悔せしめるのであるから、單に懺悔者が懺悔したといふこと自らに於ても、少からぬ滿足のあるは明かなことである。けれども聽聞者の心理狀態から見れば、それ以上に第一には、懺悔される秘密事實の內容を知ることに、多くの感興がある。從つて若し懺悔された秘密事實の內容が、聽聞者が聽いて極めて平凡なものであると、假

令それが秘密事實の全部であつたにせよ、聽聞者には少からぬ不快と物足らなさとを經驗せしめるものである。その爲めに、尙他に秘密事實が隱されて居るのであらうと、疑ひの眼を以て、興味あるやうな秘密事實を聽かうと、努めることが少くない。それが懺悔の强要の行はれる場合に、聽聞者が容易に壓制的な無理な說得や强要に至る所以である。第二には、懺悔の內容をなす事實自らを知ることよりも、秘密の扉を開くこと自らに、特殊な好奇と滿足と感興とを有することが少くない。從つてこの種のものは、容易に懺悔しないやうなものに對する場合程、特殊な熱心と强要とを敢てするものであつて、極めて容易に懺悔するやうなものに對しては、却つて少からぬ不快と物足らなさとを感ずるのが常である。

かくの如くに考へる時には、懺悔の强要が頗る複雜な動機の下に行はれることがあつて、それが頗る殘忍性や冷酷性を有して居るやうに見えるのみでなく、

事實上殘忍性や冷酷性に至り易いことあるも、決して不可思議なことではないのである。殊に聽聞者の生活內容と懺悔される事實內容とが、著しく懸け離れた場合に於て、顯著に見られることがある。かの性的生活に對する事實の懺悔が、嚴格な性的禁慾者によつて聽かるる場合の如き、其の最もよき例である。この種の實例は、宗敎家の信者に對し、又敎師の生徒に對する場合等に少くないことである。

六、懺悔と自白

自ら秘密にして人に語るまいと思つたことを、或動機から他人に打ち開けることが、普通にいふ自白である。かかる自白が、必ずしも常に懺悔であるであらうか、換言すれば自白するものが、何時も常に「惡るかつた」「惡るいことをした」と悔いながら語つて居るであらうか。實際に於ては、自白が懺悔でない

場合が頗る多い。けれどもかかる自白が外面的な觀察から、往々懺悔として取扱はれて居ることも珍しくない。のみならず自白者自らも、かかる眞に悔いたのでない自白を、懺悔したといふて居ることがある。この意味から、これをも私は假りに懺悔の狂ひの一例として擧げるのである。

即ちかかる自白は、前に述べた懺悔の虚僞のやうに、懺悔される事實內容に意識的の又は我れ識らずの虚僞が必然的に伴ふといふのではない、自白者は自己の舊惡で秘密にして居た事實を、相當な苦悶を經て、或決心の態度で、其のままに述べる場合が多いのである。從つて眞の意味に於ける懺悔の場合のやうに、可成りな程度の煩悶や羞恥や興奮や激越を、其の表情の上に見ることは稀有でない。更に言葉を換へていへば、自白に對する相當な誠實味の見られることは、必ずしもないことではないのである。而してこの種の懺悔の狂ひで次に述べるものは其の最も著しい場合である。

裁判所に於ける自白に、眞の懺悔のあるのは固より明かなことであるが、而も上に述べるやうな懺悔らしくて而も懺悔でない自白も、亦決して少くないのである。即ち法廷に於ける自白には、自己の罪業の暴露の到底逃れ難きに心づいて、樣々な關係で心にもない懺悔らしさを示すことがある。即ち中には、內心に於て舊惡を悔い再び惡事はすまいといふ何等の要望があるのでなく、只裁判官や辯護人の同情を得んが爲めに、故らに熱烈な態度で懺悔を裝ふことがある。かかる者には、この種の裝ひの極めて巧妙なものが少くなく、經驗の豐富な人も、間々欺かれることがあるのである。或は自己の行つた罪惡は、左程に甚だしいものではないのに、犯罪者が法廷で得る特殊な心理狀態に因つて生ずる虚榮から、自己の何等關係しない犯罪をも、自ら敢てしたと虚僞の自白を附け加へ、若しくは微細な犯罪であるに拘らず、却つてそれを恥ぢて極端な誇張を以て自白することがある。或は自己の舊惡暴露に對する苦惱や、强制的な拘

禁に因る精神異常や、煩瑣な審理に對する反抗心などから、一時逃れの極めて淺薄な刹那的安易の要求を起し、其の爲めに未だ眞に悔いるに至らないで、頗る輕々に懺悔らしく告白することもある。

かくの如くであるから、法廷で相當に懺悔らしく示された自白が、單に悔いた上の自白でないのみならず、時には不眞實な事實や誇張的事實が混合して述べられて居ることが少くない。固よりかかる自白は、自白者が自白する其の刹那に於て、故意に不眞實を加へ又は誇張するとは限つて居ない、其の時には極めて眞劍に又熱烈に述べられて居ることも亦多いのである。從つてこの種の懺悔らしくて而も眞の懺悔でない法廷の自白は、一部の人々のいふやうに、法廷裡に於ける特殊な心理狀態に因つて行はれるものともいふことが出來るのである。

かくて自己の生存上の運命の定められる法廷に於てすら、懺悔ならぬ自白が

頗る多く見られるのであるから、況して自由な境遇に置かれたものの自白に、眞の懺悔でないものの多いのはいふまでもないことである。

七、懺悔の美化

以上で私は、懺悔の狂ひとして觀るべきものの主なものを擧げたのであるが最後に懺悔が直接の對他人關係でなく、而もそれが具體化を經て特殊な形式をとるものとして、懺悔の美化といふことを述べて見たいのである。

直接の對他人關係でなく行はれる懺悔には、宗教的のものが最も多い。卽ち神や佛に對して、自己の舊惡を訴へ、そこに一種の信仰的安易を得やうとするもので、懺悔としては極めて一般的なものである。而してこの種のものが、宗教的美として取扱はれることはいふまでもないが、特に懺悔の美化といふべきものは、懺悔を一つの材料として藝術的に取扱はれた場合である、私がいふの

もこの意味である。

抑へつけられて居る性の欲求が、知らず識らずに藝術家の内的生活に活躍して、それが或貴い力のある立派な藝術創作の動機となることは、創作に對する心理研究家の何人も認めるところである。それと同じやうに、秘めに秘められ抑へに抑へられた過去の罪惡が、苦悶に苦悶を重ねしめ、知らず識らずの間に强い鬱積した力となつて、何等かの機會があれば虛に乘じて現はれ出でやう解放されやうとして居る時に、それが藝術創作の動機と轉換して進むことは、決して稀有なことではない。固よりかかる場合に、秘められ抑へられた罪惡と何等の關係もない別種な内容を具備した藝術の生れ出ることもあるが、時にはその秘められ抑へられた罪惡事實其のまま若しくはそれを中心としたものが、極めて赤裸々に而して醇化され美化され力づけられて、一つの藝術品となることもある。私のいふ懺悔の美化は、いふまでもなく後者の場合である。

固より藝術家が自己の舊惡を材料とする作品には、必ずしも上に述べるやうな堪えがたい内的要求の、詐りないところからのもののみではない。時には單純に平凡を破らんが爲めに、又は翫賞者の好奇心をそそらんが爲めに、又は特別に好材料の得られなかつた爲めに、或は又翫賞者のそれに對する眞劍な態度を弄び、若しくは嘲りと笑ひの加はつた特殊な皮肉と感興を味はんが爲めに、懺悔事實らしく裝つて作成されることも少くない。けれどもこの種のものは、それが非凡の藝術腕を以てされるでない以上、其の力なさと淺薄さと野卑さとに、翫賞者の感興をして裏切らさしめるものである。私のいふ懺悔の美化は、かかる力のない淺薄な野卑なものをいふのではない。

懺悔が、眞に藝術家の創作の動機となり、一つの作品となつて進む場合は、かの神や佛の前で宗教的動機から、懺悔の行はれるやうに、極めて眞摯な態度と燃ゆるやうな力とが、きびきびしく現はれる。勿論、懺悔事實に對する過去

の追憶や、時間を隔てることに因つて起る特殊な美化や、内的生活の纎細にして豊富な藝術化や、往々試みられ易き第三者としての象徴化や醜の美化等が加はつて、藝術家自らの眞の過去に於ける罪惡と、時には少からぬ形式や内容の相違を與へることがある。けれどもこれ等は、藝術家の懺悔の美化としては寧ろ自然なことであつて、そこに又美化の美化たる點も見られるのである。

尚又、時には藝術家が、或範圍殊に其の自己又は懺悔せんとする舊惡に關聯した人々に訴へんが爲めに、便宜上創作の形式を以て訴へることもある。けれどもそれが眞劍であればある程、藝術家としては、それを或形式の藝術として示すことが、最も好都合なことでもあり、又最も僞らざる眞實を訴へ得る方法でもあるのである。この意味で、私は藝術家が自己の舊惡を懺悔せん爲めに、特に創作を以てすることを、假令それが多少眞實を離れて美化されてあるにしても、又假令それが一般人の翫賞物として公表されることがあるにしても、前

に述べた故意な虚僞な態度を以て、自己の舊惡を材料とした作品と區別して、批判すべきであるのみならず、かの宗教的懺悔に對すると相類した程度の敬意を拂ふべきものであると思ふのである。

私が懺悔の狂ひを述べるのに上述のやうな懺悔の美化をつけ加へることは、一見矛盾した態度のやうでもある、けれども私は狂ひといふ意味を普通と變つたといふ意に解して述べた積りであるから、矢張りこれをも懺悔の狂ひとして取扱つたのである。

綽名と其の滑稽味

一、はしがき

諷刺漫畫が、繪畫藝術の一方に特殊な位置を有し、又我が邦の川柳が、詩歌藝術の一方に特殊と位置を有して、各々、それ等の正統的な道を外れた一種いふべからざる感興を與へると同じやうな意味で、吾々の社會に極めて廣く用ひられて居る綽名も、亦頗る興味あるものである。いふまでもなく綽名は、普通の姓名を以て呼ぶのでなく、その人に特殊な關係を有する樣々なもので呼んで、そこに普通の姓名を呼んだ場合と頗る相違した感を與へるものである。かかる意味から、私は社會の又人生の側面觀として、綽名を研究の對象として見るの

である。

二、命名と綽名

若し人が社會的動物でなくて、其の上言語が發達して居なかつたならば、今日の吾々の有するやうな姓名は起らなかつたに相違ない。けれども吾々は多數の者と相集合して居つて、個人を區別する必要の多いと共に、それに好都合な言語の發達を有して居る、ここに命名の動機が成立するのである。但し原始的な素樸社會に於ては、命名の動機が極めて單純であつて、顏面に文身して居る文身の紋樣などが、姓名の代用をなしたり、尙稍進んだ社會でも一般に理解し易い方面に、命名の動機や材料が採られて居る。

即ち一は、體格上の特徵からするもので、手力男命(たぢからをのみこと)とか長髓彥(ながすねひこ)とかいふはそれである。二は、性質上の特徵からするもので、野見宿禰と力を競ふた蹴速の

如きそれである。三は、境遇上からするもので、神武天皇の御父を鸕鷀草葺不合尊といふのは、其の御母が產氣づき給へるのに、近侍の者共上古の例で別に產殿を建てかけたところ、まだ鸕鷀草で屋根の葺けない中にお產があつたので命名されたといふことである。

けれども少しく社會の組織が複雜になつて來ると、家族制度といふものが出來、それに姓氏が定まることになつた。この姓名は比較的に不變のものとなつて、只名前丈が命名に自由の範圍を留めるに至つた。かくて名前には樣々なことから、命名の動機と材料とを採つて居る。

卽ち一は、其の子を祝福するもので、偉人の名を襲はしめ、又は秀俊とか幸一とか、貞子とか、花子とか命ずるはそれである。二は、親の理想や希望を其の子の名前に於て表はすもので、忠男とつけたり、多過ぎると思ふ時に出來た子にとめとか末吉とつける類である。三は、單に子の產れる順を示すもので、

太郎・次郎とか、はつ・つぎとかつけ、時にはそれに稍滑稽味を加へて三郎・止郎・悟郎・祿郎とつける如きそれである。四は、友人や恩人や祖先の名をつけるものである。五は、或ことの紀念の爲めにするもので、明治の末に出來て大正に生れた子に治正とし、正月三日に生れたのに正三とし、憲法發布の年に生れたのに憲とし、稍滑稽味を加へて明治三十六年に生れたのを、三六では平凡であるから三郎丸とする如き、又は孔子が鯉を贈られたのでその子に鯉と命名した如きそれである。

吾々の名は、概ね此やうなことで命名されるのであるが、其の子が成長した上で見ると、時々命名の動機や材料と全然相反したやうな趣を呈するに至ることがある。例へば何時も落第ばかりして居るのに秀逸であつたり、おしやべりであるのに靜子であつたり、風が吹けば折れさうなのに巖であつたり、人並外れて肥つて居るのに糸子であつたりすると、吾々は何だか自然の對比（コントラスト）に一種の

可笑しみを感ぜずには居られない。

のみならず吾々の日常生活に、四角四面なことのあると共に、打ち寛いだ餘裕の要求される爲あに、諧謔とか滑稽とかいふことが、自ら與へられるやうになつて居る。いふまでもなくこの諧謔とか滑稽とかいふものは、色々な形式を以て、吾々の生活に寛たりとした豐な內容を與へて居る。而して吾々の所謂奇智や頓智は、他の人々を觀察する上にも、決してその働きを鈍らすやうなことはない、又それ位の生存上の餘裕は持つて居る。そこへ諧謔味や滑稽味がつけ加はつて、特殊な人物批評を試みることも少くない。そればかりでなく、吾々は他人を善く見るといふよりも、假令それが惡意でないにしても、側面から或は皮肉の方面から或は諷刺の方面から見て、そこに一種の感興と滿足とを味ひたい傾向がある。吾々が生存競爭して行かねばならぬ運命にある間は、蓋し已むを得ぬことであらう。これ等の樣々な事實は、やがて吾々の社會に綽名といふ特殊な事實を產むに至つたのである。

私は上述のやうなことから、實際上用ゐられた綽名を蒐集して、一通りの觀察を試みたのであるが、それを滑稽味と相關係せしめて見て、頗る多くの感興を惹いたのである。

三、作成の動機

綽名は、決して近代的のものではない、古くからあつて極めて通俗的なものであつて、あだに附けた名の義である。從つて他人を賞讃し他人の美點や長所を表はした者は殆んどない、何れも他人の惡口をいふものである。換言すれば誹謗や嘲笑や罵詈や諷刺や皮肉などの方面から觀察した人物評又は風采評の、最も短縮されたものの凝化されたものである。從つて綽名の作成される動機も、亦誹謗か嘲笑か罵詈か皮肉かに、其の主なものを有して居る。固よりこれ等の

主たる動機が、時には重い程度に於て、時には輕い程度に於て働いて居ることはいふまでもない。のみならず實際に作成されて用ひられて居る綽名を觀察する場合には、この種の心理的動機卽ち感情を中心にした方面からは、區別して見難い場合が少くない。但し其の主なる場合は、次のやうな種類に分けられると思ふ。

其の人に相應な命名をしたいといふ希望。前にも述べたやうに、人の本名には往々其の個人の容貌や風采や性質と全然相反したやうなものがある。かかる場合にも、吾々が一般に矛盾や不相應に對する態度が用ひられる、卽ち勉といふ人が勉强家であれば問題は起らないが、忘け者であると勉とは呼びたくない。又お熊とでもいふ美しい婦人があつたとすると、もつと優しい名で呼びたいやうな心持になる。かかる吾々の希望は、時に綽名を作る動機となるのである。

何人にも見られる特徴。普通に特徴といへば長所であると共に短所でもある

が、吾々は何人に限らず、多少他人と趣に異にした特徴を持つて居るものである。固より素樸的な社會に於ては、かかる個人の特徴が其の人への命名の動機となるのであるが、それと同じやうな動機が、綽名の場合に働くのである。殊にこの特徴が極めて顯著なもので、他の人々と一目區別し易いものである時に一層よくこの動機が働くのである。頭髮の白い原敬氏を白頭といふ如きそれである。而して多くは美な特徴よりも醜な特徴の捕へられるのは、綽名の性質として自然のことである。

他人を善くいひたくない欲望。吾々は意識的にせよ無意識的にせよ、他人よりも優れてあり度い勝者の位置を保ちたいとの欲望を本性として持つて居る。この本性が又他人の容貌や風采や態度や性質を觀察する上にも働くのであつてこれは廣く他人に對する呼稱を蒐集して見れば明かに知られることである。卽ち他人から附けられる別名には、善い長所を捕へて命名されたものは極めて少

い、あればそれは寧ろ例外である。假令善い長所を捕へても、それに多少の皮肉が附け加へられたり、又善い意味の名が附けられて居ても、それは多く反語であることが普通である。例へば美人といふ綽名の持主が醜婦であつて、大男と呼ばれる人が小男である如きそれである。從つて綽名には他人の惡いところを捕へて命名したものが、其の大部分を占めて居るのである。

頓智の自己的滿足。世には頓智家といふものがあつて、人の注意し得なかつた特殊な方面から事物を觀察し、多くはそこに自己的の滿足を味つて居るものである。のみならず、頓智家の頓智に對して多くの人は、其の頓智を認め又その奇想天外的なのに特殊の痛快を感ずるものである。かくて綽名の秀逸ともいはれるものは、その種の頓智家によつて附けられ、又頓智家が多くは所謂綽名作りの名人となるのである。何となれば同じく人を諷刺するにしても、其の捕へられた點が平凡であつては興味が少い、殊に綽名としての生命が短い。これ

に反して若し捕へられた點が頗る奇拔であつて、一言其の人たるを想像せしめる旣のものであると、綽名としての滑稽味も深ければ、又其の生命も長いからである。

或範圍でのみ知られることとの必要。他人を皮肉にいつたり惡口したり諷刺するには、其の對象たる人はいふまでもなく、特別に關係もない人々に知らせないで、或狹い特殊な關係の者のみでする必要がある。それには本名では甚だ不適當である、ここへ綽名が採用されるのである。卽ち話して居る者の間では、綽名を以て語る上の一種の感興と、他の人々には不可解である便宜があるのである。綽名の少からぬ部分は、かかる必要上から起るものである。

これ等の動機は、先づ綽名の出來る上に重要なものであるが、綽名が綽名を作成した以外の人々にまで流布するには、又相當の理由がある。それには適當な名を得た快感や興味と、談話其のものに强味と滑稽味とを與へることと、實

際の本名より解し易く覺え易いことが、大に關係して居る。例へば「目玉が驚いて居たよ」といへば眼の大きな人が其の大目玉をぎよろつかせて居た樣が、只其の目玉といふ綽名を用ひたのみで、如何にも躍如として示されたやうである、又「半鐘泥棒が人込みの中を急いで行つたよ」といへば、如何にも背高の人が大股にひよいひよいと頭を人中から抜き立てて急ぐ樣を、目のあたり見るやうである。

四、命名の對象

綽名の作成には、種々な材料が採られて居るが、この材料の問題は、先づ命名の對象となるものと、其の對象に關係せしめて用ひられる材料とに區別して考へねばならない、今ここでは其の對象となるものについて述べやう。

本名の誤つて呼ばれたもの。これは左程多く見られるものではない、例へば

藏原(くらはら)を藏原(ぞうはら)と呼んだことからゾウ原となり又純平を鈍平と呼んだ人があつて、それが綽名となつた如きそれである。

本名を省畧するもの。これは最も簡單なもので、私の名を寺精といつたり、井上哲次郎氏を井の哲といつたり、小川平吉氏を小が平といつたりするもので、本名を呼ぶ場合の心持と、本名から出來たこれ等の綽名を呼ぶ場合の心持とでは、呼ぶ人にも聞く人にも、異つたもののあるはいふまでもない。

本名に添加せるもの。これは一般に前者よりも少いやうである、例へば五郎といふのを五郎助といつたり、私の名ならばお精どんといつたり、つねといふのをきつねといふが如きそれである。

これ等は、何れも本名から材料を採つたもので、綽名として最も幼稚であり、從つて又それに因る滑稽味も深いものではない。

身體上の特徴を採つたもの。この種のものは綽名の極めて多くの部分を占め

て居る、殊に吾々が他人の身體上の特徴を注意するに際して、最も見易い頭部殊に顔が主な材料となつて居る。例へば、頭の大きい人をあたま、鼻の大きい人を鼻といふ如きそれである。

性質や習癖や態度を採つたもの。これは身體上の特徴のやうに何人にも見られ易いものでなくて、幾分か其の人を知る必要があり、殊に複雑な精神作用に基いた性質などになると、相當に觀察した上でないと、綽名としての興味が起らないから、一般には表面的な外形的なものが、材料として採られ易いのである。例へば性質の上で、よく語るのでおしやべりといひ、習癖の上で、常に談話の際にあーうーといふのであーうーさんといひ、態度の上で氣取り家といふが如きそれである。尙この種のものとして人の嗜好物を材料とすることがある。例へば飲み助といつたり、餅の好きな金さんを餅金といふが如きそれである。

職業や經歴や境遇を採つたもの。これも相應に見られるものである。例へば

大工の八、上州の熊、五寸釘の寅吉、浪人などはそれである。犬養毅氏が憲政擁護運動の指導者となつたことから憲政の神様になつたり、今井嘉幸氏が普通選擧運動の中心となつて働くと普選將軍と呼ばれたり、恒松隆慶氏が衆議院の議場で議事の進行係をしたことから、進行博士といはれたり、戸水寛人氏がバイカル湖まで領土とせよと主張したことからバイカル博士となつた如き、何れもそれである。これは特別に惡口するといふ意味ではないが、而も必ずしも褒めたたへた時の呼び方とは幾分か違つて、其の間に少からぬ諷刺と滑稽味とを加へて居るのは、いふまでもないことである。況して衆議院へ先登第一の高名を恣にせんとして、午前五時半に當院した某氏を五時半といつたり、常に石炭の商談にのみ努めて居つた人が東京へ到着したのに、只今着炭と電報を打つた經歴のあるところから、着炭と呼ばれ、加藤高明氏が選擧運動費として某氏から五萬圓貰つたのに對し、珍品五として禮手紙を出したことから、珍品子とい

はれたりするのは、最も諷刺と滑稽味の深いもので、普通の意味に於ける綽名としては、頗る傑作の部に屬してゐる。

何れにせよ、綽名として持て囃されると否とは、先づ注意された對象の如何に因るのである。但し以上述べたものは、何れも基本材料たる場合であつて、綽名の本領は、寧ろこれ等の材料から種々な關係を辿つた用ひられ方の巧妙によつて發揮されるのである。

五、單純な形容

兎に角、身體や風采や性質や習癖や態度などに、顯著な特徴が見出されると、綽名の製作家の多くは、其の特徴のある對象を、普通の呼び方卽ち目に特徴があるのを單に目と呼んで綽名とするよりも、それを何とか形容して示さうと努めるものである。但し其の注意された對象其のものが、頗る他と異つて興味あ

るものであるか、又は其の呼び具合の面白いものであると、單純な形容であつても、綽名として相當に用ひられることが多い。

例へば、頭の特徴から四角、大あたま、でこぼこ、ピラミットといひ、頭髪からちぢれ、赤毛、しらが、禿げといひ、顏の色から赤、黑といひ、眼の形から三角、下り眼、釣り眼、其の色から茶目、白目といひ、口の形から大口、への字といひ、齒の樣子から出齒、そつ齒といひ、鼻の形から上向き、大鼻、曲鼻とか、其の色から赤鼻といひ、手の大きいことからでか手、足に毛の多いところから毛脛といひ、態度からスタイル、樣子といふ、脊丈から背高とかちびといひ、肥瘠からでぶとかやせとかいふが如き、普通に用ひられて居るものである。

けれども一般には、これ等のやうに特徴を其のまま表はした極めて簡單な形容のものよりも、其の形容を奇拔な方面に捕へたものが、秀逸として取扱はれ

て居る。而してそれには類似の聯想から、人物や動物や其の他に形容の得られて居る綽名が最も多い。

頭の形では、人物から福助、福祿壽、入道、動物から章魚、植物から金柑、冬瓜、辣韮、器物其の他から才槌、薩刀、軍艦の如きその例である。

顔の形では、人物から般若、ビリケン、ジゴマ、チャップリン、動物から平家蟹、馬、猿、鰻、斯蟇、植物から南瓜、器物其の他から柱時計、鍋蓋、杓子、練兵場(廣張つた顔)の如きその例である。

顔の色では、人物から黒奴、金佛、金時、動物から猿、植物から青瓢蕈、林檎、物品其の他から澁團扇、炭團、はんぺんなどその例である。尙痘痕は、古來人の注意したところで、又頗る人の個性を示す上に好都合なものであるから、綽名の對象として採られ、其の形容から雁もどきなどといはれて居る。

顔全體としての表情では、恐悅、惠比須、にが蟲の如きそれである。

鼻では、天狗、猪、日和見、安座などその例である。

眼では、形から聯想して狐、梟、帝釋樣、團栗、飛び出たのを聯想から蝦、蜻蛉、蛙、近視から、鮪などいふのはその例である。

口では、形の上から鰐、鰐口、鮟鱇、沙魚などそれである。

齒では、生え具合から亂杭、百木杭などそれである。

毛髮では頭髮の禿げた場合が對象とされること多く、念入り(念入りに禿げた頭)、電燈、藥罐、次に毛色其の他から、胡麻鹽、縮緬などその例である。鬚も亦材料とされ易い、卽ち類似といふことで人物からカイゼル、諸葛孔明、お釋迦、天神、動物から鰐、鯰、器物其の他から棕梠箒、たわし、ブラッシュなどその例である。

手足は、對象とされること比較的に少く、十三文、象など其の例である。

首や耳も對象となることは餘り多くない、只首では長いのを轆轤首、鶴とい

ひ、動かぬのを猪首、猪といふ類で、耳では、大きく尖つたのを兎、耳朶の大きいのを大黒、形のよくないのを木海月といふ類である。

人の特徴ある態度では子供、お嫁さん、おやぢ、老人、レディーなど其の例である。

風采では色々なものがある、これには身體上の特徴の一局部を捕へたのでなくて、全體としての體格を見た上で觀察されることが多い。卽ち體軀の長短では、高坊主とか、小人島の如き、それを物や動物や人に聯想せしめて、高くて細いのでは電信柱、十二階、麒麟、體軀の肥瘠では、それを物や動物や人に聯想せしめて、大關、布袋、西郷、立臼、曳臼、ビール樽、鎌切の如きそれである。

性質では、甘くて角のあるやうな人を金米糖、怒り易い人を芋蟲、金神様、何かといふと大騒ぎする人を二百十日、お朔日にも遊ばないで仕事したといふ

のでお朔日、噂などよく話し廻る人を電信、何時も人について歩く人を巾着、不徹底で要領を得なくてぐず〳〵して居るのを靜脈瘤といふが如き、又それ相應の性質によつて、蓄音機、長尻といふが如きである。

習癖では、話す時に唾を飛ばす人を霧吹、歩き方で、ばね、スプリング、鼻をかむ音の大きいので鼻喇叭といふ如きそれである。

音聲では、男で聲の優しいところからお嬢さま、聲色を動物に聯想せしめて七面鳥、雀、猫といひ、又金切り、銅鑼聲、猫なでなどそれである。

嗜好物や娯樂からでは、喫烟家を噴火山といひ、落語が好きといふより落語家といひ、又其の大家たる小さんといふが如きそれである。

最後に心身上の缺陷が材料とされて居ることがある。例へば痴鈍な人をおめでた、天保錢、それを反對にいつてお利口といひ、不具なところを捉へて出臍、三ッ口、兎といふが如きそれである。

それ等は、何れも比較的に單純な形容や、極めて一般的な類似な聯想から出來たものである。從つて頗る通俗的なものであつて、綽名としての傑作と目すべきものは少いのである。

六、聯想の奇警

吾々が諷刺漫畫を見る場合には、恰も今述べたやうな比較的に單純な形容に興味を感ずることが多い。これはいふまでもなく諷刺漫畫は具體的表示による描寫であるから、主としは個人の身體上の特徴や態度の上や表情の上の特徴を捕へて、それを誇張して畫かねばならない。從つて諷刺漫畫の滑稽味は、其の誇張化に重要な條件を持つて居て、それよりも更に複雜な聯想化せられたものでは、描寫し出す上に頗る都合が惡るい。これに反して我が邦の川柳は、事象其の儘を示すことに特殊な技術を持つて居ると共に、樣々な聯想關係から、具

體的に文字に表示された以外に、其の說明せんとする人物を示さないで、如何にも穿ち得たところを捕へるものである。綽名が聯想の奇警と巧妙とによつて作成された時には、恰も吾々が川柳に於て言外の皮肉や諷刺や滑稽を感ずると同じやうな意味で、特殊な皮肉や諷刺や滑稽を感ずるものである。從つて綽名の最も複雜した又進步したと見られる形式のものは、この聯想の奇警と巧妙とから得られたものである。

顏全體の表情から天下泰平とか大國民とかいへば、具體的に其の表情を示して居るのではないが、何となくそれらしさを忍ばしめるのである。顏の色の黑いのに、護摩堂の不動さんと呼ばれると、金佛とか金時とかいはれたに增して特殊な皮肉さと滑稽味が感ぜられる。又顏の色の赤いのに、火事見舞の金時といはれると、火事見舞と聯想したところが、顏の赤いのを强く思はしめる外に一層綽名としての意味が深くなるのである。

痘痕を對象としたので蚊死なんと綽名に呼ばれれば、又其の奇巧に滑稽味を感ぜずには居られない。蚊死なんとは、蚊が顔へとまつた時に、これを平手で打つても、痘痕があつて凹になつて居るところが多いから、蚊は死なぬといふのである。尙この聯想をすすめて、バンブーンを以て痘痕ある人の綽名とされるに至つては、秀逸な川柳に劣らぬ巧みさが見られる。バンと手で打つと蚊は死なないでブーンと逃げ去るの意である。次に又痘痕ある人を汗樂と呼ぶことがある。痘痕で顔面に凸凹があるから、汗が出ても急に流れ落ちないで、手巾を出して拭ふまでに餘裕があるから樂だといふのである。定めしこれ等は頓智家自らも秀逸とした部類に屬するものであらう。

鼻の上向きなのに、天井のきな臭いとか、眼の落ち込んだのに山の手の井戸、穴倉の鮑貝といふが如き、亦聯想の奇警と巧妙を示すものである。又齒の出て居る人に蟻泣かせと綽名するなども、其の一例である、蟻泣かせといふのは、

西瓜や梨を食べるに際して出齒の人であると、知らず識らずの間に甘くないところまで嚙られ、その爲めに食ひ殘しに集まつた蟻が、失望して泣くといふに因るのである。

頭の後が普通の人のやうに丸みを持たないで、垂直に殺げた人を絶壁といふ如きこの種の例である。頭の禿げた人を逆螢といふのも亦それであつて、螢は尻が光るのに、これは頭が光るからいふのである。又頭の禿げたのを、横から毛を持つて來て列べて隱した人に、簾月と呼び、又夜店のステッキ屋とも綽名する如きも、亦聯想の奇警を示すもので、簾を透して月を眺めるといふ意味と夜店のステッキが一本づつ陳列してゐる狀を思出させて、如何にも皮肉な諷刺となつて居るのである。

風采を對象として命名するのに、瘠せた脊の高い人を、半鐘泥坊といつたり、高燈籠の油さしといつたり、肥つて背の低い人を臼などといはないで、故らに

横回りといふところに、聯想の奇警が見られるのである。又、人の態度から、高きに居つて慢心せる人を長木屋の鳶といつたり、學校で鐘が鳴ると直ぐに飛び出して來る先生を、蒸汽ポンプといふのもその例である。或は又、片頰に瘤のある人を、二百十日と綽名して、二百十日の頃の稻には出た穗もあり出ぬ穗もありときかして、穗に頰を通はしたところが、綽名作者の得意の存するところであらう。

七、省略の巧妙

言語の省略といふことは、様々な點から興味のある問題であつて、單純に繁雜な吾々の日常生活に、言語を經濟的に使用するといふ便宜のある外に、省略され方が適當であると、特別な意味や趣を加へて來ることが少くない。殊に頓智を示し滑稽味を與へる上に於て、肝要な條件となるのである。帝國美術院主

催美術展覽會を帝展といつたり、明治大學を明大といつたり、傳染病研究所を傳研といつたり、流行性感冒を流感といつたり、普通選擧を普選といつたりすることは、簡便といふ外に大した意味や趣はない。けれども成り上りの金持を成金といつたり、新に官吏として拜命した人を新拜といつたり、活動寫眞の辯士を活辯といつたり、山田憲を山憲といつたりすることは、呼び方の簡便といふ以外に、皮肉味の加はつたものである。

このやうに綽名も、其の省略が巧妙に行はれて居ると、只に短く呼ぶといふのみでなくて、それ以上に綽名としての本質を著しく明かに表現することがある。殊に綽名が滑稽味を與へる上に大切な條件となるのである。從つて時には、命名の對象となつたものの形容の長い文句が、その儘では綽名としての用をなさないやうなものを短く縮めて、長い文句の形容で示す以上の滑稽味を得せしめることが少くないのである。

痘痕を對象としたのを、がんもどきといふ代りにがんとかがんもといつたり、狆の嚔したやうな顔をして居るどころから、狆くしやといつたり、天狗の面の裏のやうな顔をして居るといふので裏天といつたり、田舍饅頭のやうな顔をして居るといふのでいなまんといつたり、半鐘泥坊といふ代りに半どろといつたりするのは、何れも呼び方の短縮といふ以上に、特殊な皮肉味や滑稽味を認めることが出來る。

尙この種のもので、省略の巧妙が發音の上に見られることも少くない。例へば上向きの鼻を天井のきな臭いといふ代りに、天きなといつたり頭の禿げたのを逆螢といふ代りにぎやぼといつたり、まるで鼈のやうな顔といふのをまつぼんといつたりするのは、何れも綽名として巧妙なものといふことが出來る。

けれどもこのやうに省略の行はれた場合には、發音をした上で頗る興味のあるやうなことは多くても、それが只奇警に聞かれて何を意味して居るのか、明

かでないことが少くない。其の意味の明かでないやうな點に、又綽名としての滑稽味があり、それと同時に說明を聞いた上で更に一層の滑稽味を與へることはいふまでもない。例へば、さかびと聞いては、何となく面白さうな綽名とは受取られるが、更にそれがビリケンの顔の逆さになつたことを意味するのだと聞くと特種な感興が湧くものである。又ぼきをれと聞いても、綽名としての滑稽味を感ぜられる、けれども其の人がぼきつと折れさうな程細長く痩せた人の綽名であると知れば、そこに特別な趣が附加されるものである。或はおも兵と聞いた許りでは、只語路のよい綽名と思はれるのみであるが、それがおもちやの兵隊さんのやうな風采といふことを示すものだと知ると、一層の滑稽味を感ぜずには居られないのである。又常に口を開けて居る人を死んだ蛤のやうだといふところから、死にはまといふ如き亦この種のものである。

かくの如くに綽名の內で省略の巧妙なものは、上述したやうな通俗的なもの

は別として、多くは相當な説明を俟たないと、充分に其の意味の解されないものであるから、狹い範圍の人々の間で用ひられ、人の知らぬ諷刺や滑稽や皮肉を、お互の談話の際に味はれて居るのである。

八、綽名と用意

一般の藝術家が、其の制作に對して多大の用意を費すやうに、滑稽や諷刺や皮肉を中心とした諷刺漫畫や川柳なども、其の秀逸たり傑作たる程、制作家の少からぬ用意が認められるものである。私が今問題として居る綽名のやうな通俗的言語藝術に於ても、其の考案者はそれ相應の用意をして表現して居る。

かくの如き綽名の表現上に於ける用意は、前に述べた省畧の巧妙にも、亦聯想の奇警にも、これを發見することは出來る。けれども頓智に富んだ綽名制作の名家は、同じやうな綽名にも特殊な注意を拂つて居る、その點が、吾々には

一つの興味のあるところである。

例へば、憲政擁護運動の指導者であつた、犬養毅氏を憲政の神様といひ、衆議院の議場に於ける議事進行係の恒松隆慶氏を進行博士といひ、普通選擧運動の中心人物たる今井嘉幸氏を普選將軍といつて居るなどは、固より同一の綽名作家の手に制作されたものではないけれども、それ相應な用意があるやうにも思はれて興味がある。

或は又、小川平吉氏を小ガ平といつて片假名のガを用ひ、又藏原惟郭氏の姓をゾウ原と片假名を加へるところなども、新聞紙などに文字として示される綽名には、特別に意を用ひたものといはねばならない。卽ち吾々は耳から聞く場合は發音の具合に重きを置いてよいのであるが、新聞紙上で表現するやうな場合には、目で見た上で特殊な皮肉が有效なこととなつて來るのである。尙又、一方に着炭翁と書いて居るのに、五時半氏と書かれたり、砲兵工廠職工で社會

的に活動して居る人を工廠子と書いて居るが如きも、其の呼ばれて居る人々の年齢の相違を知らしめる以上に、特殊な趣を添へて居るやうに思はれるのである。

これに類したことは、同一人に附けられた綽名の變化にも見られることが少くない。この種のものは或意味からいへば綽名の進化である。但し同じく同一人に對する綽名の變化であつても、其の人の境遇に應じて綽名の變化する場合は別である。尾崎行雄氏が初めに憲政擁護運動に努力して憲政の神様と呼ばれ次に普通運動選擧に盡力するといふので普選の神様と呼ばれかけて居る如きその例である。

風采が何處となく活動寫眞の辯士のやうであるといふところから、初め活辯と綽名されたのであるが、活辯といへば餘りに通俗的であつて、綽名としての皮肉味や滑稽味に乏しいと認められ、そこで今度は、活動寫眞館で奏する樂隊

の聯想からピーヒヤラトットといふ綽名になつた。又露西亞のマカロフ將軍の容貌に似て居るところから、初めにはマカロフ先生と綽名されて居つたのに、それが變化してマカちやんとなつて、綽名としての滑稽味を多からしめるやうになつた場合もある。

これ等は綽名の使用される上の用意であつて、而も其の用意は綽名本來の性質に適合するやうに努められて居るのである。前に述べた綽名の省畧の巧妙がこの意味で行はれて居ることの多いのは、いふまでもないことである。

九、結末

かくの如くに綽名を觀察して見ると、それが極めて廣い範圍に行はれて居る丈けに、興味のある材料の豐富なと共に、吾々の對他人的の特殊な批評的態度から、又談話上に於ける樣々な要求から、其の廣い範圍に行はれる所以を推察

することが出來るのである。のみならず吾々は、かかる一般的に用ひられて居る現象によつて、吾々の社會生活に關する一面の心理を觀察することも出來るのである。

次に又、言語が吾々の思想の發表の手段であつて、思想の變化と共に言語にも種々の變化を伴ふやうに、綽名も其の社會の思想の一部の反映たることが少くない。ここに於て特殊な社會には特殊な種類の綽名が制作される。例へば、鑛物學を修めかけた生徒が、暗算の上手な先生に安山岩と綽名したり、歐洲大戰爭の話題に上り勝ちな時分に、身體が大きくて歩き方の遲い人をタンクと綽名したり、お菓子の食べ盛りの少年が、採點の甘い先生を飴ちよこと綽名したり、家事のことなど習つて居る女學生が色の黑い人を澁團扇と綽名するが如き何れもそれである。かかるところに又、綽名の用ひられる場合の滑稽味が生じて來るのである。

要するに、綽名と其の滑稽味といふ問題は、先づ個人を代表せしむべき特徵の選び方の適當と、其の選ばれた對象に關する聯想の奇警と特徵の表示に對する省略の巧妙とが、主として綽名に滑稽味を與へるものである。殊に、前に述べた實例によつて見られるやうに、聯想の奇警は、類似の著しいのと對比的なのと誇張的なのと境遇や經歷や性行等に特殊な關係を有するのとで得られ、省略の巧妙は、語路の奇と發音の容易と不分明に應ずる釋明とで得られる場合が多い。或語を添加して滑稽味の加はることもあるがそれは比較的に少い。何となれば呼稱として用ひるのであるから、簡潔が一つの要件であるからである。但し着炭と呼ばないで着炭翁と呼んで前者に對すると幾分違つた感興が添へられ、マカロフを略してマカとし、それにちやんを附けマカちやんとして可笑味を增し、又は暗算の發音にがんの二音を添加して安山岩なる全く別な方面の聯想に導くやうな場合は、何れも、滑稽味を與へる上に、有意義なこととなつて

居る。

大正十年七月一日印刷
大正十年七月八日發行

惑溺と禁慾

【定價貳圓八拾錢】

著者　東京市牛込區余丁町九八　寺田精一
發行者　東京市外品川御殿山七一八　中村蓊
印刷者　東京市芝區南佐久間町二ノ十四　大戸作逸
印刷所　東京市芝區南佐久間町二ノ十四　內外印刷合資會社

發行所　東京市外品川御殿山
振替東京三一一七七　日本精神醫學會

不許複製

—一九二〇七〇一—

2801 464 280 1840

寺田精一著述目錄

危機に富める青年及兒童期	菊三一八頁版	絕版	東京神田嚴松堂	
囚人の心理 再版	菊五九〇頁版	貳圓五拾錢	同	
ハンスグロース犯罪心理學	菊五五二頁版	不分賣	東京小石川大日本文明協會	
婦人と犯罪	四六四〇〇頁版	不分賣	同	
ロンブローゾ犯罪人論 再版	四六三四二頁版	壹圓五拾錢	東京神田嚴松堂	
兒童の惡癖 三版	四六四七八頁版	貳圓	東京上駒込心理學研究會	
科學と犯罪	菊四四二頁版	參圓	東京小石川大日本文明協會	
犯罪心理講話 再版	菊六〇六頁版	四圓八拾錢	東京上駒込心理學研究會	
惑溺と禁慾	四六八〇頁版	貳圓八拾錢	東京市外北品川日本精神醫學會	

慈惠院醫專教授
精神病科專攻 醫學士 森田正馬先生新著

神經質及神經衰弱の療法

最新刊 四六判總布裝函入 總紙數五五〇頁 定價二圓九十錢 送料十二錢 滿鮮臺支三十錢

本書は著者が過去廿年間の眞摯なる研究と經驗とに基き、神經質並に神經衰弱に對する在來の學說と治療法とを根柢より覆へしたる新著にして、其の獨創の見解に富める事と其の治療實例の豐多なる事とは、此種著作中恐らく本書の右に出づるものなからん。醫師は以て自家療法の參考に資すべく、病者は又其の自衛上好個の指導者を得たる思あるべく、一般人士は以て絕好の精神修養書となすべし。敢て大方諸士の一讀を薦む。

東京御茶ノ水川山 日本精神醫學會 振替東京三一一七七番 電話高輪一〇四三番

主幹　文學士　中村古峽

【大正六年十月創刊　毎月一回一日發行】

月刊雜誌

變態心理

定價一部　金五拾錢稅壹錢
半年分稅共　金參圓
一年分稅共　金五圓八拾錢

△本誌は日本唯一の變態心理學研究雜誌にして、毎號諸種の靈的現象を始め天才、偉人、精神病者、不良少年、犯罪者等の心理に關する有益にして興味深き諸專門學者の研究を發表す。

△心靈學、變態心理、精神病理、犯罪心理、群衆心理、精神療法、催眠術、變態性慾等の智識に通曉せんと欲する者は、是非とも本誌を讀まざるべからず。

△特に教育家、宗教家、法曹家、醫士、文學者、家庭父兄諸君の必讀を薦む何となれば、是等の人々は其の任務上、最も深く人間の變態心理に精通し置くべき必要あれば也。

變態心理合本

第一卷　定價壹圓八拾錢　稅十二錢
第二卷　定價壹圓六拾錢　稅同前
第四卷　定價貳圓貳拾錢　稅同前
第五卷　定價貳圓五拾錢　稅同前
第六卷　定價參圓五拾錢　稅同前

東京品川御殿山　日本精神醫學會　電話高輪一〇三四番　振替東京一一七七番

變態心理學講義錄

六ヶ月卒業
毎月一回六冊完結
總紙數二千二百頁

我が學界破天荒の試學!!
科目は何れも精神科學の精華
講師は悉く斯界第一流の權威

□變態心理講義　文學士　中村古峽氏
□精神療法講義　醫學士　森田正馬氏
□心靈學講義　文學士　小熊虎之助氏
□犯罪心理講義　文學士　寺田精一氏
□群衆心理講義　文學士　葛西又次郎氏
□催眠術講義　文學士　中村古峽氏
□臨牀催眠術講義　實驗心理研究所主幹　向井章氏
□變態性慾講義　性之研究主幹　北野博美氏

▼入會者には諸種の特典あり。詳細規定并見本入用者は往復葉書にて問合せありたし。

申込所　東京品川御殿山振替貯金東京壹壹五〇壹番　日本變態心理學會

▽▽文學士中村古峽監修 變態心理編輯部著

少年不良化の徑路と教育

四六判美裝二七〇頁 送料十錢 定價 壹圓八拾錢

△△

家庭の危機!!!

聞くも恐ろしき少年犯罪者の横行は何を語るか!!!

少年思想の惡化せる今日甚しきは殺人・强盜・詐欺・窃盜犯罪は少年の手に遂行されて吾人の生活を脅威しつつある。國民全般の由由しき大問題である。本書は少年不良化の防止を説いて緊切、現代人士の必讀書、家庭教育の好參考書である。

内容一斑

不良少年の問題・恐るべき不良少年の犯罪・不良少年の種類と團體・不良少年を生む環境・不良少年の遺傳と素質・不良少年の感化救濟・家庭教育と不良少年・思想問題としての不良少年

東京品川御殿山 日本精神醫學會 振替東京三一一七七番 電話高輪一〇四三番

503
47

終